

郷土資料館の

お宝探訪

Treasure
9

英語で書かれたヒコの自伝 『THE NARRATIVE OF A JAPANESE』

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。
播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

幕末から明治時代初めにかけての大きな変革期のなかで、国際人として活躍したジヨセフ・ヒコ(幼名、彦太郎)の波乱に満ちた半生について、ヒコ自身が自伝を書き残しています。今回はその自伝『THE NARRATIVE OF A JAPANESE』の紹介です。

この本は上下2巻からなり、全て英文で書かれています。発行人は、ヒコの養女である浜田吉で、上巻には奥付はありませんが明治25(1892)年に刊行されたようです。下巻は明治28(1895)年に丸善書店から刊行されています。郷土資料館が所蔵している『THE NARRATIVE OF A JAPANESE』は、昭和25(1950)年に日米出版協会が出版した復刻版で、アメリカ向けには原本どおり上下2巻で、日本では上下巻を合本した形となっています。この本の特徴は、日

本語で書いたものを英訳したのではなく、初めから英語で書かれていることです。幕末から明治維新の激動期の日本の社会を、風俗、習慣、我が国の歴史なども交えながら、外人、特にアメリカ人に知らせようとして出版されたものだとはいえるでしょう。

彦太郎は13歳のとき、乗り組んだ「栄力丸」が嵐によって難破、それから約2カ月弱、乗組員16人とともに漂流します。漂流の後、アメリカ船オークランド号に救助され、アメリカに上陸するまでの42日間で経験した異文化体験と、その順応力についてのエピソードを紹介しましょう。
彦太郎は救助された日に、バターの塗られたパンとスープを差し出されます。しかし、バターの臭いに耐えられず、スープだけを美味しくすうに平らげました。ところ

が、仲間の一人から、そのスープに牛肉が入っていたことを知らされ、不浄だと責められます。良心に背いたと考える反面「知らぬが仏」とも考えます。動物とは知らずに食べてしまったのだから仕方がないと考えたようです。その後、彦太郎を責めた仲間が肉を食べているではありませんか。その仲間は「郷に入れば郷に従え」と率先して肉食を始め、他の者も特に異議を唱えず肉食をします。

この当時の日本人のもっていた仏教観から、四足動物の肉を食べることは不浄とされていました。しかし彼らが、あまり抵抗なく肉食を受け入れたのは、空腹だったことや船乗りという職業柄もあつたのかもしれませんが、日本人の緩やかな宗教観も作用していたのかもしれない。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男



▲自叙伝に描かれた生家



栄力丸の難破の記述▶

町の人口 11月1日現在

(住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,805人(+30人)

男…17,071人(+11人)

女…17,734人(+19人)

世帯数…14,147世帯(+18世帯)



PRINTED WITH
SOY INK

Trademark of American Soybean Association

